和洋女大文家政 ○伊藤秀三郎
我妻美奈子

1. 藤纈は正倉院の御物の中にみられ、絹布、麻布に蠟書きがなされ現在それが保存されている。前回は蠟材の種類、温度に於ける防染力について検討し、各種蠟の適温がわかった。そこで今回は布数と筆材とにしぼってその防染効果を探究した。

2. 試験布は市販されている木綿、麻及びレーヨン等である。染料はナフトール染料で、染法は浸染法で蠟書きでの室温は $20 \pm 1^{\circ}\text{C}$ で使用蠟は一般に使用されている市販の白蠟、パラフィンの2種類を選んだ。

蠟の溶解には、蠟の温度を一定にする、ロー溶し器「サーモ・スタット」を使用した。筆材は丸筆と平筆との比較をした。

技法は前回と同様に試験布の下に濾紙を敷き一定量の蠟を含ませ一定の筆圧で素早く筆線を描くことにした。蠟書き後布はナフトール染料で染着しその後ソーピングを行った。防染効果の判定は光電比色計によって行った。

3. 今筆圧が同じ場合、布についても筆材についても防染効果に於いて多少の相違が認められると思考された。